



Pflanzenbiologie in Japan auf Grund eigener Beobachtungen. (自らの観察に基づく日本の植物生物学)

Hans Molisch (ハンス・モーリッシュ), 1926

著者のハンス・モーリッシュ氏は、オーストリアのウィーン大学で教授を務めていた植物学の権威で、1922年、誕生したばかりの東北帝大・生物学教室に主任教授として招かれました。本書は2年半に及ぶ日本滞在中の発見をまとめたもので、直訳すると「自らの観察に基づく日本の植物生物学」です。後の優れた研究につながるテーマが数多く含まれていました。

p.182の鳥の写真は、モーリッシュ氏の「メジロがツバキの蜜を吸う写真がほしい」との強い希望を受けて、助手の相馬悌介氏（のち新潟大教授）が撮影したものです。広い教室内にメジロを放し、ツバキの枝をデスクスタンドに結び付けて辛抱強く待ちながら、一日がかりで撮影したそうです。

日本滞在中の業績は「理科報告（生物学）」に論文9編を発表しているほか、帰国後、本書とともに日本見聞録の「Im Lande der aufgehenden Sonne（日出ずる国にて）」を出版しています。（邦訳出版タイトルは「植物学者モーリッシュの大正ニッポン観察記」。）

参考文献：

回想のモーリッシュ/渋谷章

植物学者モーリッシュの大正ニッポン観察記/ハンス・モーリッシュ

東北大学理学部生物学教室五十年史



■ハンス・モーリッシュ Hans Molisch (1856-1937)



オーストリアの植物学者。父は園芸家で、メンデルと交流があり、その影響で植物学を目指したという。1922年に65歳で来日。1925年に帰国し、ウィーン大学総長を務める。植物解剖学、細胞生理学、とくに植物顕微化学の各分野で多くの業績を残し、発光細菌や温泉微生物の研究も行った。糖類を検出する「モーリッシュ反応」に名前が残されている。

東北帝大での待遇は手厚く、総長よりも高給な上に、新築の家と専属の助手つきだった。(ただし用意された家には住まず、研究室を一部屋使って住んだ。)

好奇心、向学心が非常に旺盛で、「自然科学者は常に自然を観察していなくてはならない」とよく口にしていた。助手の相馬氏は旅先の温泉で何度も高温微生物の採集を命じられ、排水溝にへばり付く怪しい小僧と外国人して交番に連れていかれたこともあったという。

(写真：東北大学理学部生物学教室五十年史より)

■片平キャンパスの「ハンス・モーリッシュの樹」



モーリッシュ氏は日本を離れる 1925 年に片平で杉の植樹をした。日光に旅行した際に根本が一本なのに幹が分岐している杉を見て、これは一本の杉が 2 本になったのか、または 2 本の杉が癒着したものかと疑問を持ったため、太さ 5-6cm の細い杉を 5 本、約 30cm 間隔に植えた。将来これが癒着するかどうかを見る実験を宿題として生物学教室に残していくつもりで、その理由を書いた札を掛けたという。現在 94 年が経過し、「ハンス・モーリッシュの樹」という碑とともに 2 本の杉が残っているが、癒着には至っていない。

(写真：「東北大学ポケットガイドテクルペ」より)